

# 三十年間、飽きもせず

『漢書』卷十九の「百官公卿表」は上下に分かれて、上には諸官職の沿革が述べられ、下には前漢一代の三公九卿の一覧表が載っている。たとえば紀元前一四〇年の武帝建元元年の三公のところを見ると、

「丞相」の欄では、六月、衛綰免ぜられ魏其侯奮、丞相となる。

「太尉」では、武安侯田蚡、太尉となる。

「御史大夫」では、斉の相牛抵、御史大夫となる。

とあり、前年から変動が無い場合は空欄にしてある。人物や功績とは無関係にすべての高官が網羅されているから、同年代の顔ぶれを調べるのに甚だ便利である。こうした表のアイデアはすでに『史記』の「漢興以来将相年表」に見えている。

二百年余に亘る百官公卿表ほどではないが、わが史学科にもこれに匹敵する創設以来三十年の授業担当一覧表がある。それもごく最近、平島助手のワープロ技術によって実に見事な表になった。昭和三六（一九六一）年度から平成三二（一九九一）年度まで基礎演習、日本・東洋・西洋の諸概説、特講、演習等を誰が担当したか、漏れない

	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
高教演習 (1年)	原	原	原	原	A 原	原	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田・原	井上	井上
					B 清水	清水	小倉	小倉	小倉	小倉	小倉	小倉	小倉	小倉	金沢
基礎演習 (2年)		小倉	小倉	小倉	小倉	児玉	児玉	児玉	児玉	原	原	原	井上	井上	
史学概論	末松	末松	末松	末松	末松	末松	清水	清水	末松	金沢	金沢	清水	原	原	原
日本史概説	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	原	原	原	安田	安田	原
東洋史概説		末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	末松	小倉
西洋史概説	金沢	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	金沢	金沢
古文書学概説	児玉・原	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	新山	新山	新山
考古学概説等		三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上
古文書学				鈴木	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上	三上
文献学															
史学概論															
史学史															
日		児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉	児玉
特		原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原
講		大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保
		原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原
		安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田

## 小倉芳彦

くびっしりと打ち込まれ、どのコマがいつ増設され、どのように引き継がれてきたかなどが一目瞭然である。史学科三十年の歴史この一枚に在り、と言っても過言ではない。ここには参考のために創設ごろの一部分をお目にかける。全体のおよそ八分の一程度と御承知いただきたい。

この一覧表から否応無しに眼に入るのは、史学科専門科目の授業

コマ数の漸増ぶりである。一年生しかいなかった初年度が、基礎演習一、史学概論一、特講三の合計五コマだったのは当然だが、三年目の昭和三八年度になると二七コマ、大学院の史学専攻が設置された四〇年度では三四コマにのびている。それが平成三年度になると実に六〇コマに達している。このような増加はむしろ入学学生定員や、専任教員数の増加に伴ったことで、その経過は三十周年記念の卒業生名簿の附録略年表を見ていただきたい。

こんなに整然とした担当一覧表ができるということは、史学科のカリキュラムの大枠が創設以来殆ど変わっていないことを示すが、同時に一定の枠の中でいかに柔軟に学科が運営されて来たかをそれは語っていると見えよう。

それにしても三十年間を一望のもとに収めたこの表を見ると、私事ではあるが一種の虚脱感を覚える。というのは、そこには「小倉」という小さな文字が昭和三六年以来、基礎演習、東洋史特講、東洋史演習などの各欄に細い糸の如く続いている。それは自分がたしかに史学科教員の一人であった存在証明ではあるにしても、反面、我が半生の営みここに尽きたりの感慨なきを得ぬ。

とはいえ、これはあくまでも「正史」の表であり、この表の背後には学生諸君を含めた史学科の「野史」に当たるさまざまな行事があったはずである。その中で逸すべからざるものは、一年生の研修旅行と各ゼミで行なわれる合宿であろう。ここではその中から東洋史の合宿にかかわることを書き記しておきたい。

\*

史学科三十年のうち、前半の東洋史の同僚、と申しては恐れ多い、私にとっては師に近い方が末松保和教授だった。柳田節子先生は、末松教授の定年御退職後、宇都宮大学から学習院に来ていただいたから、後半の十五年余私の同僚となって下さったことになる。

その後半十五年のなかで前半と最も違った点を挙げれば、東洋史のゼミ合宿を飽きもせず、しかも柳田先生と合同で夏も冬も続けたことを逸するわけには行かない。

東洋史関係の合宿が前半でなかったわけではない。しかしそれはゼミの延長としてではなく、同好の士女が集まって「アジア史研究会」をつくり、その活動の延長として時々合宿をやっていた。歴史をたどると昭和四〇（一九六五年）八月以来、蓼科・那須・真摺梯・白馬といった山地や、沼津・戸田・弓が浜・下田・妻良などの海岸を選び、小人数ながら細々と続けて来た。私は教師としてではなく、研究会の一会員として参加するテーマを貰いたつもりだが、それでも「大学紛争」の昂揚した一九六八、九年ごろには、このような研究会も「解体」すべきだという議論が飛び出て、合宿が揺れたこともあった。今はもう遠い昔のことのような気がする。

柳田先生が着任されたのは、そのような嵐も諸大学で一通り収まった七六年四月のことだったが、その前年ごろから、私の都合で休講が重なった東洋史演習を合宿で補講することが始まったように思う。それが柳田先生着任以後、合宿先は両ゼミ一緒で、テキストは別々に選び、コンパは合同でやるという形式がほぼ定着して行った。

合宿先の選定や交渉は毎年度のゼミ幹事が担当したので、よほど行く先にチエが出なくて困り果てたとき以外は、同じ場所が重なる

ことはなかった。当たり外れも大きいが、土地柄、人柄、設備などに予期せぬ要素がある分、スリリングである。関東・甲信地方から時には奥州にまで及んだ合宿地のなかで、環境絶佳ナンバーワンは、八七年七月の戸隠にとどめをさす。高原の爽涼の満点は言うまでもなく、奥社までのハイキングも山歩きのお好きな柳田先生は気に入られたようだった。とくにわれわれ(少なくとも私)を満足させたのは、中社前の戸隠そばのおいしさだった。冷たくて、コクがあって、昼食には往復一時間前後かかるのもいとわず、毎日通ったものである。

それにひきかえワーストワンは、白樺湖畔の某民宿である。とにかくこわいオバサンが切りまわっていて、夜半に廊下をうろついては叱られ、コンパで声を立てれば叱られ、で、一同縮み上がってしまった。こういうくらしい民宿はもうこりこりである。

そんなさまざまな経験から生まれた合宿の選定基準は、不動産広告流に言えばこんなところになるうか。

夏涼冬温泉付／約二、三十人／ゼミ室二以上／深夜コンパ可／泊〇千円以下

\*

前後合わせて三十回を越える合宿の中で、柳田先生が参加されなかった時があった。一九八二年十二月の熱川合宿の折で、先生は梶谷の虎ノ門病院にご入院中だった。主を半ば欠いた合宿はいささか寂しかったが、それでも恒例の「世ノ人曰ク」は盛り上がり、その中の傑作を記しとどめて病室の柳田先生へ慰問にお届けした。

そもそもこの「世ノ人曰ク」なる遊び、紙と鉛筆しか道具がなかった貧しき時代の遊びともいうが、なかなかどうして戦後半世紀近くたった今でも、すくなくも東洋史の合宿では不滅(?)の行事となっている。なぜこの遊びが飽くことなく長続きしているか。

(一)配られた紙片のそれぞれに、誰が、いつどこで、誰と、何をしたら、と各人勝手に書いて各項目に取りまとめ、適当にシャッフルして順番に読み上げる。だいたいナンセンスな内容が多いが、時に偶然の組合わせのなかに「作為のない真実」が現れることもある。——ここまでなら小学生でもやるが、

(二)誰が、いつどこで、誰と、何をしたら、の他に、「太史公曰ク」を気取るわけではないが、「世ノ人曰ク」と題する短い評語も書いて集めてある。誰かと誰かがやった大むね愚劣にして些末な行為と、「世ノ人」の下す厳肅かつ高次なる批判との不調和な組み合わせが、読み上げてみるとまことにオカシイ。

それに十人から二十人という、比較的年齢や知性(?)の揃ったメンバーに恵まれたことも、東洋史合宿でこれが長続きできた理由にあげられるかもしれない。

合宿の思い出は勉強の内容よりも食べものノミものに多くつながっている。近頃のペンションやシャレーはなかなか凝った料理も出すが、一般の宿の朝夕の食事はあまり期待していない。私自身の好みで言うと、山梨の西沢渓谷での合宿に差し入れてもらったアワビの煮貝のキモが忘れられない。三浦海岸の舟宿で夜食に出たキンメダイの舟盛りの刺身もよかった。

突発的事故で思い出すのは、一九七八年暮れの河口湖合宿の帰路

である。午後に入って降りだした雪は、われわれの乗ったバスが吉田の町に入る頃には激しさを増し、大月への高速道路はアツという間に閉鎖。旧道の方は渋滞どころか全くの停滞。一寸刻みに動いては止まるバスを降りて酒屋でウイスキーを仕込み、屋根に積もった新雪を窓から腕を伸ばして搦っては、紙コップに詰めてウイスキーを注ぐ。これぞオンザロックならぬオンザスノウ！ やっと大月まで脱出して、新宿のターミナルに着いたのははや深夜であった。

柳田先生をはじめ何人かの乗客は、途中で諦めて富士急の電車に乗り換えたが、私を含めた合宿の仲間はこのバスに最後までつきあい、コップ片手に「世ノ人曰ク」などの遊びに興じて、終始ゴキゲンな旅を続けた。

今年度九月の合宿先としてゼミ幹事はふたたび戸隠を選んでいる。宿も同じだという。ベストワンの印象が壊れぬことを私は祈っている。柳田先生も同じだろう。

(一九九一・八・一七)

追記。この期待は裏切られなかった。そばは相変わらずうまく、毎夜飲む信州濁り酒もよかった。